誠実　　ロシア（バルカル・カラチャエフ地方）

遠い昔、ある山の村に、ひとりのおじいさんが、家族と暮らしていました。みんな仲がよくて、いっしょに畑仕事をし、いっしょに食べ、喜びも悲しみも分けあっていました。満ち足りて安らかな毎日でした。

ある冬の朝早く、おじいさんは、馬に飼い葉をやろうと外に出ました。庭にはいちめんに雪が深く積もっていました。そして、戸口から門まで、雪の上にま新しい足跡がついていました。だれもお客は来なかったし、家族はみんな家の中にいます。おじいさんは、おどろいて、足跡がどこに続いているのか、確かめることにしました。

足跡をたどって行くうちに、村を通りすぎ、野原に出てしまいました。それでも、足跡はまだ続いています。しばらく行くと野原の真ん中にのばらのしげみがあって、そこで足跡がとぎれました。おじいさんは、立ちどまりました。

「今朝早く、うちから出て行って、このしげみに隠れているのはだれだね」と、おじいさんは、声をかけました。すると、しげみの中から声がしました。

「わたしだ。おまえさんの《幸せ》だよ。村はずれの小屋に住みたくなって、おまえさんの家を捨てることにしたのだ。だが、おまえさんはわたしに追いつくことができたから、ひとつだけ、願い事をかなえてあげよう。一番欲しいものは何だね。家畜か、土地か、すばらしい服か」

おじいさんは、

「ちょっと待ってもらえないか。家に帰ってみんなと相談するから」といいました。

「よかろう。しばらく待つとしよう。が、なるたけ早く帰っておいで」

おじいさんは、大急ぎで家に帰ると、みんなに、《幸せ》が出て行ってしまったこと、追いついたこと、そして、《幸せ》がひとつだけ願いをかなえてくれることを話しました。みんなは相談を始めました。

おばあさんが、

「もっとたくさんの土地を頼みましょう」といいました。上の息子は、

「すばらしい馬を頼んだほうがいいんじゃないかな」といいました。娘たちは、

「きれいで立派な服をもらったほうがいいわ」といいました。こうして、みんながロぐちに、願い事をいいだして、自分の願いが一番だといいはりました。

末の息子の若い妻は、おとなしく聞いていましたが、そっといいました。
「もしできれば・・・誠実さを頼んでください」
おじいさんは、びっくりして、
「よくいってくれた！」とさけびました。おばあさんも、喜んで、
「このわたしも、年寄りなのに、誠実さを頼むなんて、ちっとも気がつきませんでしたよ」といいました。息子たちもその妻たちも、娘たちも、みんな、その願いこそがほんとうだといいました。
おじいさんは、野原へ急ぎました。のばらのしげみまで来ると、《幸せ》がいいました。
「長いこと相談していたのだね。おまえさんの一家は何に決めたのかね」
「何もいらんが、誠実さだけは置いて行ってください」
すると、《幸せ》はいいました。
「どうもおまえさんの家を捨ててては行けないな。誠実のある所、わたしもいるのだから」
こうして、《幸せ》はおじいさんの家にもどって行って、みんなはまた、満ち足りて安らかな毎日を過ごしました。
おしまい

村上郁　再話

資料　『ロシアの民話Ⅰ』ガツァーク編／渡辺節子訳／恒文社